〔ロシア人漂着〕（昭和七年十二月一日、ロシア人四人漂着）

私が尋常小学校四年生で一一歳の時であったから、昭和七年のことであったと思う。その日は十一月頃で、雨降りの寒い日であった。松ケ崎小学校深沢分校で授業を受けていると、半鐘が鳴ったので、皆で浜へ走って行った。見ると沖の小舟が風に吹かれて、みるみる近づいて浜に打ち寄せられた。舟にはロシア人が三人乗っており、うち一人は少年で、すでに死亡していた。見物人の中に猟師がいて、鉄砲を担いでいたので、怖がってなかなか舟から降りようとしなかった。やっと浜に上げて焚火を焚いて暖めた。味噌汁を飲ませようとしたが、しばらく飲めなかった。焼飯を与えたが、米の飯を食ったことがないのか、手の中でこねって、食べなかった。仕方がないので、本荘の町からパンを買ってきて食わせた。とりあえず公民館に連れてきたが、頭髪にシラミがひどく、バリカンで丸坊主にした。また木の風呂桶を借りてきて入浴させた。着物は村人の古着を着せた。言葉は本荘の町から学校の先生を頼んだが、通じなかった。しかしカムチャッカで新聞記者をした男がおり、スラスラと話合うことが出来た。この男は後々まで巡査にあやしまれて、おおいに迷惑したという。

このロシア人は、四、五日ほど滞在した。分校に授業を見に来たりした。また店先からミカン一箱を無断で持って行ったが、何も言うことができなかった。死んだ少年は庵寺（あんでら）の庵主様に祈禱してもらい、埋葬して十字架を立てた。